

「農村たたみ論」を跳ね返す 理論と実践のためのバイブル

評 榎田みどり（農業ジャーナリスト、明治大学客員教授）

記者として今まで現場で感じたことの断片が、まるでパズルのピースのように、一つひとつ著者の描くビジョンの中に収まっていくような感覚になった。著者の本はいつも、上滑りな「空中戦」に走らず現場に基づいた実践的な理論を組み立ててくれて勉強になるが、なかでもこの本からは、著者の本気度と気迫をひしひしと感じた。

本書は、1990年代から今まで繰り返し登場する「地方消滅論」、その適応策として語られる過疎集落からの住民撤退、地方拠点都市への移住（「多極集住」）などの「農村たたみ論」へのガチンコの反論から始まる。

同時に、「人口減少だから消滅」ではなく、逆に「人口減少社会の下でも持続できる新たな仕組み作り」を考える「低密度居住地域

論」こそ重要な課題と主張する。

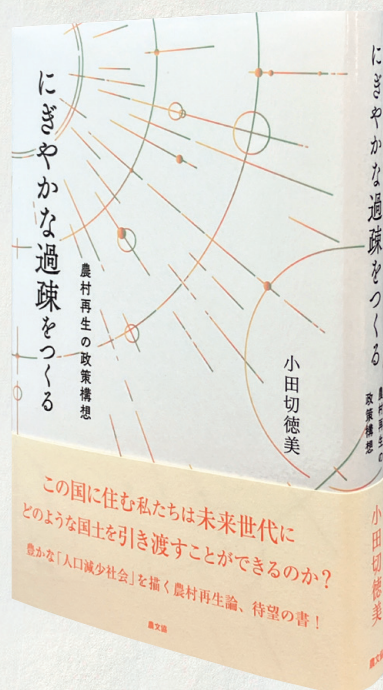
では、どうすれば持続的な地域づくりが可能か。その「実践編」として、各地に見られる地域づくりの新展開を、これまでの経緯とともに分析。そのうえで、この動きを広げていくために求められる国と地方自治体の農村政策のあり方を論じている。国の政策では、農水省以外の省庁事業にも視野を広げている点を示唆的だ。

つまり、理論・実践・政策の3部構成で、本書のタイトル「にぎやかな過疎」をつくるために何が必要かという著者の主張がこの一冊にまとめられている。

70年にはすでに、集落集団移転という「農村たたみ」が政策として促進されたものの進まなかった歴史を、この本で初めて知った。「にぎやかな過疎」の先進事例と

して登場する山形県小国町は、集団移転事業でも初年度に採択され、当時の経験がその後の新たな地域づくりのベースになっているという指摘も興味深かった。

文調は穏やかながら、行間からは、農村たたみ論や農水省の地域政策に対する激しい憤りと、現場に対する熱いエールを感じる。地域づくりのリーダーや自治体関係者はもちろん、農村たたみ論者や、農水省の心ある官僚さんたちにもぜひ読んでほしいと思う。



『にぎやかな過疎をつくる 農村再生の政策構想』

小田切徳美 著

農文協 2420 円（税込）